

The Whisper from Amherst



エミリーのささやき

エミリーは30歳頃より白いドレスを着るようになりました。教会にも行かずに家事手伝いをしながら、ごくわずかな人を除いては世間づきあいも断るようになって、一冊の詩集も出すことはありませんでした。

でも、少女の頃から友人に送る手紙に自作の詩を添えたり、知人や親せきにお菓子といっしょに詩を贈るなど、親しい人々はエミリーの詩を目にする機会がありました。

この詩は、兄嫁のスーザンからの手紙に対してエミリーが贈った詩です。エミリーは、「あなたの便りは、風のようにでした。聖書では心を表すのに、風（ということば）を使っています。」と書き添え、「風」が心を表すmetaphor(メタファー)（隠喩、象徴）であることをほのめかしています。この見えない「風」は感情に動揺が見えない、平安な心の状態を語っています。

エミリーに限らず、そして詩人に限らず、風に心を重ね合わせたり、風に命を感じたりする人はたくさんいるのではないのでしょうか。



'A Wind that rose'



A Wind that rose

森の 木の葉いちまい

Though not a Leaf

揺れなかったけれど

In any Forest stirred

鳥の国の はるか上空

But with itself did cold engage

ただ独り 冷たく吹いた

Beyond the Realm of Bird -

風

A Wind that woke a lone Delight

別離の波のうねりが

Like Separation's Swell

極北で凍って見えなくなったように

Restored in Arctic Confidence

たった1つの喜びを目覚めさせた

To the Invisible -

風